

平成 23 年度

事業所名 : グループホーム「後ノ入」

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0390300085		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム「後ノ入」		
所在地	岩手県大船渡市赤崎町後ノ入73番地3		
自己評価作成日	平成 23年 10月 4日	評価結果市町村受理日	平成 24年 1月 30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0390300085&amp;SCD=320">http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0390300085&amp;SCD=320</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成23年10月20日

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は東日本大震災からまもなく開所しており、被災された方々の受け入れを行った。およそ9割の方が被災者で住み慣れた自宅を流され、持ち込み家具も何も無い状態で入居となった。しかし、利用者のお年寄り職員は互いに支えあう中で信頼関係を構築し、今現在では自分の家のように感じてもらっている。また、そのご家族も日常的な訪問を繰り返すことで家族の絆を断ち切ることなく、互いを支え合っている。当事業所ではそういった家族の絆や地域との関係を重視し、交流を途絶えさせることのない様、常にお年寄り、ご家族の気持ちに寄り添い、地域に溶け込んだケアをしたいと考えている。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、平成23年3月10日に開所、事業開始は4月1日の計画であったが、開所翌日の3月11日の東日本大震災の対応のため、併設する小規模多機能居宅介護と一体となって地域住民の皆さんの避難場所としての受け入れが事業所の最初の取り組みであった。しかし、この被災に伴う多くの地域の皆さんの受け入れ支援が地域との繋がりを深め、信頼を得る大きな財産となったとしている。現在のホームの利用者の殆どは被災を受けた方々で、家も近いため安心した生活を送っている。ホームのスタッフは若い方が多いが真剣に対応する姿に対し利用者・家族、地域の皆さんは温かい目で見守っている。管理者の取り組み姿勢は、地域にこだわり、地域にとって「大樹」となるホームを地域の皆さんと一緒に育てたいとしている。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム「後ノ入」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「大樹を育む」を事業所の理念に掲げ、スタッフミーティングを定期的開催し理念の共有を図りながら、地域密着型サービスの意義である、地域に根ざした事業所づくりを実現するため丸となって取り組んでいる。	理念「大樹を育む」は併設する小規模多機能型介護事業所と同じであるが、職員間で話し合い、この地で生まれ、この地で育ち、この地で暮らし続ける利用者のために、ホームはしっかりと地域に根を張って地域の拠り所となる大樹を育てたいと実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近所の方も面会等で足を運んでくださっており、徐々に地域との交流も深まっている。また事業所で企画する行事に地域にも参加していただいたりと、交流する機会も定期的につくっている。	被災により多くの方々がホームに避難されたことにより、地域とは良い関係がつけられ、地域の方々との交流を深めたり、子供たちが遊びに来訪、朝の挨拶や日常的な会話等により付き合いをしている。今後とも地域へ出向いたり双方向の付き合いを深めたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	東日本大震災では地域の方々へ避難場所として当施設を開放した経緯がある。避難生活で共に過ごしたことで、地域が抱える認知症の問題を相談しやすい関係を築き、相談も増えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	当事業所の利用状況や運営状況等を報告し、意見交換を行っている。また家族の参加により、利用についての意見が挙がることで、サービス向上にむけての検討も行っている。	併設する小規模多機能と合同で開催し、委員も13人と多く、両事業所の役割や特長等の理解が深まっている。年度初めの会議では震災関係の話題が中心で、備蓄の在り方やホームは地域と共にあるといった意見など、会議を通じて地域の方々の考え方や期待を知る重要な機会となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	震災を期に、より市町村との連携・協力関係が深まった。また災害時だけでなく、運営推進会議を通して、利用状況について把握していただいております。随時相談や助言をいただいている。	仮設住宅の利用者で認知症対応の在り方や、1人暮らしの支援等幅広い対応の在り方について連携し合いながら取り組み、行政との協力関係は密にして取り組まれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所における運営規定でも記載しており、身体拘束は行われていない。今後も利用者の尊厳に配慮したケアを行うよう心掛ける。	現在、身体拘束を必要とする方はいないが、身体拘束の弊害をホーム内の学習会等を通じて理解しており、また利用者に対しては権利を尊重し、礼節と尊敬を持って接すると契約書に明言し、利用者のしたいことを制限しない支援を心掛けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止について研修予定である。社会的にも問題となっているが、言葉遣いや身体的ケアにおいても思いやる気持ちを大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護を利用している方もいるため、今後は関係機関より講師を招き、正しい知識を持ったうえで関わられるよう取り組みたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者及び家族に対し、契約・解約時は書面をもとに十分な説明を行っている。また不安や疑問点に対しては常時相談に応じている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族アンケートを作成しており、11月に実施する予定である。	家族アンケートの実施計画のほか、ケアプランの確認の際や、利用者の体調報告の機会を通じて聞くようしており、職員から話題をだすことで、家族の方から提案が出されることもある。なお、事業所に言いにくいときは第三者委員を通じた情報提供をお願いしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフミーティングを開催し、意見を出し合い検討し、運営等に反映させている。	開設6カ月目を経過し、また日常業務等の改善点検を行うため、各種委員会を立ち上げたほか、スタッフも若いことから明るい雰囲気の中で、ミーティング時に意見、要望を出し合い取り組んでいるとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人の就業規則や給料規定に沿った労務管理を心掛けている。また職員個々について把握し、働きやすい職場環境の整備も心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員に対しては法人内外分野を問わず、各種研修会に適任者を参加させ、専門的に業務に従事させるよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	各研修の受け入れや、県外からの視察も受け入れている。また、今回の震災においても各機関からの調査、視察にも応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の不安や要望を傾聴し、初期の段階で信頼関係を築き、本人の安心につながるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	震災の影響で緊急的に入所となった方が殆どではあったが、面会時や担当者会議等で家族、本人のニーズを理解し、信頼関係を築いていけるよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意向を的確に把握し、様々な視点から必要な支援を提案・相談している。各関係機関とも連絡をとり、適切な対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者本人の能力を見極め、諸作業を一緒に行う等の自立支援や、安心して共同生活を営めるような支援・関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の役割を事業所が全て担うことのないよう、連絡を取り合い、バランスのとれた関係を築くよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	震災により、馴染みの人や場所との関係が大きく変わってしまったところはあるが、可能な範囲での支援や、関係の再構築に努めている。	震災により環境が大きく変化したことにより、馴染みの方々の行き来や、行ってみたい場所が変わってしまい難しい面もあるが、ご近所の方々や友人、家族の訪問があり、更には新たな馴染みづくりに努めたいとしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関わりを大切に、関係を把握し、様々な配慮を行うよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用者が退所する際は、ご本人、ご家族に相談はいつでも受け入れる旨を伝え、関係が継続されるよう努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	震災の影響はあるのもも、ご本人、ご家族の希望に限りなく応えられるよう職員は配慮し、ケアプランにも反映させている。	「あたりまえの暮らし」ができるようにという視点から利用者や家族とのコミュニケーションを大切に、日常の会話や買物での会話、また担当者会議時等の家族から把握した情報をセンター方式を活用して反映している。	家族から「利用者は家庭的な雰囲気でご過ごしている」「職員が家族的な雰囲気で見られる」と日頃の取り組み姿勢を評価しており、引き続き利用者・家族の期待に沿う対応を望みたい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントにおいて、本人・家族から情報をいただいている。またそれを担当者会議等を通して、職員間で把握できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の関わりの中からわかる本人の状態や、家族等からの情報を掛け合わせ、暮らしの現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各職員が日々の関わりの中から得られる本人を情報を基に現在の本人のニーズを把握しケアプランを作成、担当者会議の開催、サービスの提供、評価を行いチームアプローチができるよう努めている。	利用者担当を決めており、担当者が作成したケアプランを踏まえ家族も含めた担当者会議やモニタリング、アセスメント内容等を検討し、利用者の持っている能力を引き出して生活でできる支援に心がけている。	家族から「本人のできる事は本人にさせるようにしてくれている」と評価しており引き続き利用者本位、利用者の意向を踏まえたケアプランとその実践に期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の心身の様子を個別記録に残し、その中でも本人の支援につながるような気づきや情報は職員間で共有しあい、ケアプランの見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その都度本人・家族と相談することで適切な支援・対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議や地域団体等から地域資源の情報を収集するとともに地域と行政から協力を得て新しい地域資源の開発や活動など本人が安心して暮らせるよう支援している。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診の対応は基本的に家族に行っているが、対応できない場合や受診の際に必要な生活記録の報告など、本人・家族の希望に沿った支援をしながら医療機関とも連携を図っている。	医療受診は利用者・家族の希望するかかりつけ医を利用している。受診の際は原則家族対応とし、緊急時のときは職員対応としている。家族対応のときは生活記録を情報提供し、職員対応のときは診察結果を家族に報告している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	当事業所においては非常勤の看護職員を配置し、日々の利用者の健康状態を把握、介護職員に対する情報提供、指示を出しながら適切な対応をしている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院された際には、直接病院に出向き状態を看護師等から収集し、退院後における対応について話し合い、ケアプランに反映できるよう計画している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者が重度化、または終末期になった時は、ご家族、ご本人と綿密な意思確認を行い、当事業所のできる最大限のケアを提供できるよう計画している。	開設間もないことから重度化や看取り対応の方針は未策定であり、当面は医療機関の支援を頂くこととしている。なお、重度化等に至ったときは基本的にホームとしてできる範囲で対応しながら医療機関と連携し、かつ家族と相談しながら対応するとしている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は救命救急講習の受講や事業所での勉強会に参加している。また緊急連絡網を作成し、事故を想定した訓練するなど、急変時の対応と連携体制を整えている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的な避難訓練を行い、その際は近隣の方々にも協力していただいている。また運営推進会議を通して、事業所と地域との協力体制についても討議している。	避難訓練は併設する小規模多機能型居宅介護事業所と一体となって取り組んでいる。また消火設備としてスプリンクラーや防災カーテンを整備し安全対策を図っている。なお、震災を踏まえ地震や津波等に対する対応をさらに深めたいとしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の性格や今現在の状況、状態を把握し、その時々状況に応じた適切な言葉かけや対応をするよう努めている。	トイレ誘導や名前を呼ぶ際の声掛けが、利用者の誇りやプライバシーを損ねてしまう恐れがあることから、ミーティング等で配慮するよう話し合い確認している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話の中でも選択肢を与えることで自己決定の機会を増やし、ご本人の意思を尊重することで生き生きとした生活ができるよう配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	自宅での生活の流れをベースに、本人の希望を聴きながら、その人らしい暮らしにむけて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類選択や整容、散髪など機会の確保において支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好の把握に努め、献立を工夫したり、季節のイベントを行い楽しむ機会もつくっている。また利用者と一緒に買い物から片づけまで関わることで、食事に対する意識がけにもなっている。	皆から食べたいもの、好きなものを聞いて利用者と一緒に買い物しその食材や畑から収穫した野菜等で調理している。時には地域の皆さんとバーベキューをするなど食事を楽しむ機会を作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士、看護師と連携し、利用者の好みに応じた職位時提供に努めている。また、摂取量について随時記入しけんこうかんりにもやくだてている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	洗面所へ誘導し、その人にあった口腔洗浄の支援を行い記録に残している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別記録より、排泄パターンを把握し、その人に合ったトイレの誘導や声掛けをし、トイレでの排泄・排泄の自立にむけた支援を行っている。	排泄支援は、利用者の大きな自信につながることから、一人ひとりの目標を定め、排泄パターンの把握データに基づきそれに改善工夫を加えながら支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量のチェックや食物繊維の多い食事を提供するなど、日常的に便秘の予防に努めている。また排便の記録を行い、主治医とも相談しながら下剤による排便コントロールも行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	清潔保持の為最低でも一日おきにはお誘いしているが、希望があればその都度応じ、ゆっくりと入浴できるよう配慮している。	入浴時間は特に決めていないが、毎日、入浴可能で、午前中の中の入浴利用者が多い。入浴の際は職員の見守り支援を行っており、その際に利用者の思い出や希望等を聞き、記録しケアプラン策定に活かしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各居室にその人らしい居住空間をつくることで、安心して生活・休息できるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	病気や薬の情報を一覧表にし、職員がすぐ閲覧できるようにすることで内容について理解できるようにしている。また、連絡ノートの活用や、申し送りの徹底により周知に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事を中心として自立支援を行うなど利用者の能力に応じた作業をしていただいている。日中の空いている時間は自分の部屋でゆっくりと気分転換できるよう環境に配慮している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に合わせたバスハイクや、日常的にも買い物に同行して食材を選んでもらうなどしている。	震災により一時出たがらず、また海岸も破壊され避けたが、買物には毎日、利用者と一緒に出かけたり、春は、桜やつじを見に五葉山・温泉等に出かけたり、時季に応じ出かけるようにしている。	外出支援について様々な工夫しながら実施しているが、家族は体力の減退を心配し戸外に出る機会を多くして心身面の気分転換等を希望していることから、引き続き工夫しながら支援するとともに、家族に普段の外出等の活動情報を提供することも一考である。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理について当事業所がお預かりしている分を買い物の際に使ったりすることで、社会参加して頂いている。また、日常的な買い物でも会計をして頂いたり、残存能力の発揮に努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人または家族より希望があった場合は、希望に沿うようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングにおける気温、湿度は常に気を配り健康管理にも役立てている。また、皆さんで作った作品や、季節を感じていただけるような者を置くことで楽しんで頂ける環境づくりに心掛けている。	ホームは相談室を間に挟んで小規模多機能型居宅介護事業所に増設したつくりであるが、居間や食堂などの共用空間は小規模より少し広くゆとりのある感じで、畳の間や、ソファ等も整備され利用者がそれぞれ自分の思いで過ごせる場が確保されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	普段の生活の中ではおのずと気の合う方々が出てくるが、そうでない人との関わりを持ってもらうために職員が間に入り会話を盛り上げたり支援し、関係構築に努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	被災された方がほとんどなため、使い慣れた物や思い出の品がないのが現状ではあるが、本人・家族に居室に必要なものの購入等相談している。	ホーム周辺に近い方々の利用のため、また家族も近くに住んでいるため安心感、安堵感があり、持ち込みしている物も身の回りのもの为中心で、日中は皆さんと談笑しながら過ごしており、ほっとした生活を送っている姿はほほえましく感じる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	普段の生活の中で安全な環境を提供するためにシンプルな構造となっている。利用者の皆さんはトイレや台所を覚え、自立支援にもつながっていると感じる。		